

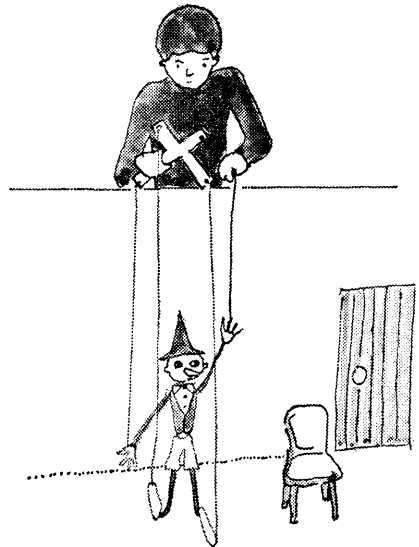
# 理解の共同性

津守 真

保育において、保育者が子どもの理解を深めることにより、子どもの心の世界は展開する。

理解は、特定のおとなと子どもとの間にとどまらな  
い。保育の場に関与する人々の間で理解が共有されると  
き、そこは子どもが成長する場となる。

十年のある日、D夫はめずらしく私の膝の上に坐り、  
紙に字を書いたりしてしばらくの時を過した。それから  
私の手をひいて、ホールの隅のやぐらの下で、ふとんを



かぶって横になった。D夫は、このところ、とくに個人  
的な配慮を必要とするので、私が職員室でゆっくりとつ  
き合うことが多かったが、自分からふとんにもぐったの  
で、静かに過す時を必要としているのだろうと思ひ、そ  
のままにしておいた。三十分ほどもそうしてのち、私は  
一緒にふとんに足をいれて話しかけると、うれしそうな  
表情をみせた。

保育の後、いつものように、職員、実習生と話しあっ  
ているとき、私は、はじめて、D夫のこの朝のできごと

を聞いた。

D夫は登校してすぐ、年令も体も小さいF夫を、その母親のいる眼前でつき倒した。近ごろはほとんどしなくなっていたのだが、一学期の終りころには、たえず気を配っていないと心配な時期があった。この朝は久しぶりだったのだが、F夫の母親は、D夫の手をとって、どうしてそんなことをするのか？と真剣に訴え、涙を流した。

D夫が私の膝の上で時を過し、ふとんにもぐったのは、このあとのことだった。弁当のときには、いつも全部食べるD夫が、その日は弁当を残したとのことだった。D夫は、自分がわるいことをしたらしいと感じたように、それで一日中しょげていたのだらうと思われる。

この日の話合いのとき、保育園からきている実習生が、自分の園だったら、泣かされた子どもを相手の子どもとどこにつれていって、やり返させ、つき倒した子どもをもっと強く叱るだろうと話した。それはある程度

当然のことである。おとなが傍にいるとき、おとなは自分の考えを子どもに伝えなかったら、子どもはおとながどのように考えているかが分らないだろう。しかし、おとなの社会の道徳規準を示せばそれですむわけではない。

私は、子どもが小さい子どもをつき倒したり髪を引張ったりするとき、まず、つき倒された子どもを守り、その場で相手の子どもにいろいろいう。けれども、それだけでは問題は解決せず、同じことが何度もくり返される。D夫の場合には、この子どもと真剣にかかわって、その内心の課題の解決に力をかすおとなが必要と考え、私は、職員室でD夫と何週間も過した。父親を二年前に亡くしたD夫は、私との間で、物を落す遊びをくり返した。このことは興味深い課題であるが、ここではこれ以上立ち入らない。

二学期になって、職員たちと、私はD夫のことで懇談し、これまでのD夫と私との経過を話し、皆の助言を求めた。その結果、D夫が他の子どもをつき倒すことを防

止しようとするあまり、D夫の行動を監視することになるとよくないこと、D夫がもっと自由に行動できるようにすること、——このことは子どもが自分で判断して行為する主体となることを意味する。——そしてむしろつき倒される子どもの方におとなが注意を配るようにしようということが、大体の合意に達したことであった。こういうことは、実際に移したときには、決して徹底しうることでない。けれども、D夫にとっては、いくらか過しやすい環境になったのであろう。D夫が他の子どもをつき倒すことは、目に見えて減少した。

この日の話し合いのとき、F夫の担任のI先生から、次のようなことが話された。

二学期になって、D夫がF夫をつき倒したときに、F夫の目の前で、D夫に、いままでよりもきつく注意するようにしたところ、F夫はそれまでいくらやられても平気でD夫の傍にいったのに、D夫がくると部屋の戸をしめたり、D夫を避けたりするようになった。そのこと

を、いま反省しているという話であった。

実際、一学期は、F夫は何度つき倒されても、平気でD夫の傍に近寄ったのは、驚くほどであった。二学期には、F夫も周囲の状況を認識する能力が増したかもしれないが、この担任の先生は、おとなのことばの使い方によって状況が変化することを観察したのであった。

しばしば、教師は、自分の行為を正しいとする考えから脱出できないのであるが、この担任の先生は、自分を含めた状況を公正に観察していることに私は感心した。

D夫がとくにF夫に目をつけることについては、それだけの理由がある。F夫には一才の妹がいて、母親は毎日、その妹を抱いてくる。F夫も小さくて可愛いのだが、母親に守られている小さな子どもの姿を見ると、父親のいないD夫には、制することのできない感情が湧き起ってくるようにみえる。D夫がこの子どもをつき倒すのは、一方には、この子どもに対して強い関心があるからだろう。無関心だったら、近寄ることもしないだろ

う。内面には、うらやみや拒否感の複雑な感情もあるにちがいない。

このことのあった次の日、別の母親が、庭で私に話しかけてくれた。きのうは、母親たちの部屋で話が出たのだが、年齢が小さいときには、自分の子どもが他の子どもからやられると、どうしてそんなめにあわなければならぬのかと思う。しかし、何年かたつとその関係が逆になることもある。加害者の立場になると母親はもっとつらい。普通の子どもは学校にゆくと、いじめたりいじめられたりすることは日常的なことである。これによって、子どもは成長してゆくのでしょうかという話であった。F夫の母親をめぐってのことであることは明らかだった。この話をききながら、私ははじめてこうした経験をする母親に対する配慮を欠いてはならないと思った。そして、他の母親たちが、F夫の母親に、違った視点から見るができるように助けてくれているのを知って、心の中で感謝した。

この日の帰りがけ、私はF夫の母親に、きのうのD夫は私の膝の上とふとんの中にくるまって過したことが、D夫に対して真剣に率直に語りかけてくれたことが、この子どもの心に響いたのであるうことを話した。F夫の母親は、このことを通じ、D夫に対して一步近寄ったのではないかと思う。

更に、私は、これらのできごとの故に、F夫自身が母親から愛され守られている体験をしたであろうことを見落してはならないと思う。小さな妹が母親にびったりとだかれている姿をみて、F夫は疎外感をもってきたであろう。いま、F夫は、母親が真剣に自分をかばってくれたことを知った。これはF夫の成長にとって大きな体験であると思う。

ここに記したことは、保育の場で普通に起っていることであるが、保育に関与するさまざまな人の立場が、一日の間に集約してあらわれているので、とくにとり上げた。

もう三十数年前のことであるが、私が付属幼稚園に入りしはじめたころ、三才のクラスで、他の子どもに乱暴して威張る子どもがいた。ある日、理由なく他の子どもを泣かしたのを見た私は、これは許せないと思い、その子の肩をつかまえ、激しく怒った。その日、保育の後、私は、H先生から「きょうのあなたのやり方は、三才の子どもに対してすることではありませんでしたね。おとなの正義感から子どもに向うだけでは保育にならないことを、私は知らされた。それ以来、こういう場面では、私はどうしたらよいかということは、継続して私の課題であった。

ある子どもが他の子どもをつき倒したときにどうすればよいかという単一の絶対的な答えはないのだと思う。その場では、相手の子どもが心身ともに傷つかないように、また、両方が一緒にその場を共有できないかと、精一杯に何かをする。

ことはその場だけではすまない。いつもつき倒す子どもに、その子ども自身の負っている課題があるならば、そのことと取り組むことは、保育上の課題である。また、相手の子どもにも、それを誘発する状況があるかもしれない。それらのことには、保育者自身のかかわり方を反省せねばならない場合も多い。保育の場にかかわるおとなたちが、結果としての行動だけにとらわれないで、それぞれの子どもが生きている歩みに目をとめて、どの子どもも生きやすくなるように保育の場をつくることとが、共同の課題になる。

理解は、ひとりのおとなと子どもの間だけでなく、保育の場にかかわる人々に共有される時、子どもはその理解の場において、成長するであろう。すなわち、おとなたちが理解した分に応じて、子どもは成長する。

(愛育養護学校)